

第3学年学級活動学習指導案

平成18年12月7日(木)

3校時 3年C組教室

指導者 N・T

1. 題材名 いじめ加害者・被害者想定

2. 指導計画

ねらい	主な学習活動	主な評価の観点	時間
いじめ被害者の気持ちを考える。	・ いじめられて自殺した子が残した言葉からいじめられることのつらさを想像する。	・ いじめられた子の気持ちを理解し、いじめについて考えることができたか。	1
いじめの被害者、加害者になっていじめについて考える。	・ いじめの被害者になったつもりでいじめの内容を考える。 ・ いじめの加害者になったつもりでいじめのおろかさを考える。	・ どんなものがいじめなのか考えることができたか。 ・ いじめのばからしさ、おろかさについて考えることができたか。	1 本時

3. 指導にあたって

今、いじめが原因で自殺した子どもたちのニュースが毎日のように伝えられる。このごろはだいぶ目立たなくなったが、この3学年が入学したとき、特定の子を避ける、あざ笑うといったことが見られた。その子が近づくと汚いものが通るかのように大げさに壁に張り付き、道をあける子どもたちの姿を見て驚愕した。そういったことをする愚かしさを話してみても「言われるほうにも原因がある」と訴えてきた子どものそんなことを言われるのは心外であるといった真剣な表情が今でも忘れられない。テレビや新聞などで伝えられる現実離れした、この町とは関係の無い話ではなく、初めて目の当たりにした現実の光景であり、これからどのようにしていけばよいのか見当がつかなかった。ただただ愚かしさを訴えただけで根本の解決にはなっていなかったように思われる。

残念ながら3年C組にもいじめと言われても仕方の無い軽はずみな言動があふれ、実際に心を痛めクラスに入りづらくなっている子もいる。以前、友人との関係に悩み、部活にいけなくなったり、教室に入りづらくなった経験を持つ子でさえ、「あいつウザイ」などと平気で口に出している様子を見ると被害者という立場も反対に加害者という立場も危ういもので、いつ入れ替わっても不思議ではないと実感している。傷ついた経験があると周りの

人に傷つくことは言わないと思っていたのだが、のどもと過ぎればで、平気で文句を言ったり、あからさまにいやな顔をする子どもを見ていると、こういったいじめの問題はそのつど繰り返しやっていかないといじめについての意識は残らないのではないかと考えた。

道徳の時間に北海道の小学生が自殺したときに書いた遺書をもとに考えさせた。身近にも似たようなことがないか書かせたところ7名の生徒が「いやなあだ名で呼ばれている人がある」、「以前こんなことをされた」とか「似たようなことがある」と答えた。「ない」と答えた生徒も9名いた。女子児童の遺書を読んで思ったこと、考えたこと書かせたところ「つらい気持ちをわかってあげたい」、「いじめをなくしたい」といった感想が多い中で「いじめられる人も強くならなくてはいけない」、「弱すぎる」といった感想を持つ生徒もいて、いじめに対する認識や意識に温度差があり、いじめがあっても気づかなかったり、ただの傍観者になってしまうのではないかと考えた。

今回の授業では、『いじめ撲滅』の授業（内海俊行著、明治図書）を参考に被害者だけでなく、加害者になったことも想像させていじめについて認識を高めるとともに、いじめを許さないという気持ちを少しでも多くの生徒の意識にとどめさせたいと考えている。

4. 本時の流れ

